

八重山の^{ニンブチャー}念仏者、その受容と葬送の変容
—波照間島のサイシの事例を中心に—

古谷野 洋子[※]

はじめに

1713年に琉球王府によって編纂された地誌『琉球国由来記』には、浄土宗の袋中上人が渡来して、仏経文句を俗にやわらげて那覇の人民に伝えたことが念仏のはじめであると記されている〔外間・波照間 1997 p.131〕¹。しかし、実際に庶民に念仏を広めたのは、ニンブツァ、ニンブツァ、ニンブチャー（念仏者）、チョンダラーと呼ばれた人々であった²。彼らは首里の^{アンニヤ}行脚村に住み、門付け芸人でもあり人形芝居とともに万歳系の芸能を携えて行脚していた³。普段は物乞いをしていたが、ひとたび葬式があると、那覇・首里はいうに及ばず、近隣の村々まで出かけていき、あるいは僧とともに招かれ、念仏を唱えながら鉦を叩き、米や酒や餅を貰った。このとき彼らはニンブツァ、ニンブチャーと呼ばれた〔池宮 1990 p.21〕。

佐喜真興英『シマの話』（1925年）によると、宜野湾市新城では葬式に際して、1人の男がニンブツァ（念仏者）を迎えに首里か那覇まで行った。ニンブツァは卑しめられた存在であり、人々は一般に乞食の頭領くらいに考えていたという。ニンブツァは死人の家で小屋か雨戸を立てかけて作ったところに鉦をつるし、ケンケンケンケンとカネを打ち、時折死人の枕元に來たり、彼世の案内めいたことを語った。鉦を打ちながら葬列の末に加わり、墓でもいわゆる念仏をやったという。島人はこれは著しく功德のあるものと信じ、僧の読経は欠くことはできても、これは無くてはならぬものとされた〔佐喜真 1925 pp.95・96〕。士族は念仏者や僧は二人以上頼むことが出来たが、百姓は各々一人ずつしか頼めなかったという。〔名嘉真・恵原 1979 pp.116・118〕。

念仏者の主な研究には宮良当杜『沖縄の人形芝居』（初版1925年）、島尻勝太郎「ニンブチャー」（『沖縄の外来宗教 - その受容と変容 - 』収録 1978年）、池宮正治『沖縄の遊行芸 - チョンダラーとニンブチャー - 』（1990年）、田場由美雄「沖縄のニンブチャー・チョンダラー」（『漂白する眼差し』収録 1992年）などがある。従来の念仏者に関する研究は、主に彼らの念仏の研究、あるいは彼らの漂白する存在であったといえよう。また、沖縄県の市町村史や字史にも葬儀に関与した念仏者の記述がみられる。

では、八重山諸島における念仏者の受容はどうだったのか。宮城文『八重山生活史』（1972年初版）、新城敏男「宗教（2）仏教の伝播と信仰」（『八重山の社会と文化』収録 1973年）、喜舎場永珣「八重山列島の葬礼習俗」（『八重山民俗誌』収録 1977年）、森田孫栄「葬制」（『石垣市史 各論編 民俗 下』収録 2007年）、および各字誌によると、八重山でも念仏者による念仏

※神奈川大学日本常民文化研究所特別研究員

鉦の風習があったと記されている。石垣島ではニンブジガニ（念仏鉦）は各字に備えてあって、それを叩く人も各字に一人ずつ指定されていたという〔宮城 1985 p.462〕。

波照間島では、1980年代まではサイシが葬儀に鉦を叩いたという。サイシはポーズ、ネンブツ、ニンブツなどとも呼ばれていた。つまりサイシは念仏者であった。本論では主に波照間島の念仏者であるサイシが島の葬送にどのような役割を果たしていたのか、葬送の儀礼と習俗からみていきたい。さらに、念仏者の関与によって葬送がどのように変容したのかについても考えてい。サイシの役割を検討し、従来の葬送に関する儀礼・習俗の中で、サイシが何を引き受け、何を引き受けなかったかを考察することによって、八重山の島々で念仏者がどのように受容されたかの一端がわかる。念仏者の受容に関する考察は、仏教民俗が八重山の島々でどのように受容されたかの一考察でもあるといえる。

また、本論は八重山における葬送の研究ではあるが、筆者が続けている沖縄の地域研究、つまり波照間島研究を通した八重山研究の一環でもある。

最後に主な用語の記述について述べたい。八重山諸島は八重山と特別な場合を除き統一して記す。ニンブジイ・ニンブツァ・ニンブチャー・ネンブチャー・ニンブー・念仏・念仏者などは念仏者と、念仏鉦・カネ・鐘・鉦などは鉦と基本的には統一して記すが、引用等の場合はそれに従う。しかし、上述の用語の統一についても文脈によってはそのかぎりではない。また、島の人々はしばしば集落を部落というので、本論でもそれに従う。なお、本論における葬送とは、自宅（通夜・葬式など）、墓地までの葬列、墓地における儀礼と習俗を指す。初七日以降の供養、洗骨などは原則として省く。葬式、葬儀、葬礼などの用語については、時代や地域性、さらに話者によっても異なるのであえて統一しなかった。

1. 八重山の念仏者

八重山の仏教の受容と念仏者について記す。

(1) 八重山における仏教の受容と念仏者

八重山が琉球王国の実質的な支配下に入ったのは16世紀初頭、“オヤケアカハチの乱”以降といわれる。以後、八重山の人々の精神生活においても王府からの指導・干渉等が行われた。先島（宮古・八重山諸島）に寺院が出来たのは、薩摩侵攻以後のことである。薩摩藩は侵攻後、琉球全土の検地を行なったが、寺もなく人々は宗旨の何であるかも知らなかったという先島の検使の報告から、先島に寺院を建立するように王府に命じた〔外間・波照間 1997 p.195〕。

八重山の役人の記録『^{まいりつかわし}参遣状 抜書』の中には、八重山の桃林寺の住持についての記述をいくつか見ることができる⁴。康熙26年（1687）の条には、八重山の僧侶が3年交代から5年交代になったこと、首里・八重山間の渡海の際には4ヶ月の飯米を必要としたが、僧の交代の費用は地元の負担とされていたことなどがわかる〔石垣市総務部市史編集室 1998 p.13〕。同書の1688年の条では、八重山では生霊が折々出るので、祈祷や占いをしたり、お守り札などを出してくれる真言宗の僧侶の派遣を役人が王府に希望している〔石垣市総務部市史編集室 1998 pp.14・

15)。僧が官僧であったこと、またどのような役目を期待されていたかがわかる。

八重山における葬送についての記録は、王府から八重山に布達されたいくつかの「取締帳」に見ることができる。1875年に布達された「富川親方八重山島取締帳」では、派手に行われるようになった焼香・茶毘の簡素化を命じ、茶毘のとき牛・豚を殺して酒肴とするのを禁止している〔石垣市総務部市史編集室 1991 pp.34・35 p.53〕。また、同取締帳には「葬礼定め」が設定しており、坊主を招請する場合は頭以下目差までは2、3人、若文字以下役についてない奉公人は1人に限るとあり、百姓で坊主を招請する場合は1人のみ、生活に困っているものは坊主を呼ばず経巾だけで済ますこととある〔石垣市総務部市史編集室 1991 p.69〕。

王府の八重山支配の中で、首里の文化を八重山に伝えたのは主に公務で八重山と首里を往復した士族たちだった。彼らは八重山各地に役人として赴任したので、さまざまな首里の文化を八重山各地に伝えた。念仏を八重山に伝えたのも士族であるといわれている。八重山では盆に祖先祭祀として音曲を伴うアンガマが行われ、最後の日にはシマイが演じられるが、そのとき歌われる浄土宗系の念仏歌は宮良親雲上長重^{みやらのべんじんちやうじやう}によってもたらされたであるといわれる⁵。「山陽姓家譜」には⁶、順治14年（1657）に公用で沖縄島に赴いた宮良長重が念仏を稽古して伝えたという「王府時稽古、村々為授念仏法徒是始也」という記述がある〔石垣市総務部市史編集室 1994 p.12〕。宮良長重は1647年に八重山最高位の役職である「頭職」を拝命した人物である。新城によると、宮良長重によって招来された念仏は、浄土系念仏と考えられ、伝来の初期には講による布教がなされ、政策的配慮をも加味しながら各離島にまで広がり、念仏者は公的なものとして部落に存在することとなり、葬式に参加したという。葬儀における念仏者の意義は、請来当時の供養から訃音告知という本来の意図から離れて解釈されるまでに至ったが、その時点においてもなお後生への引導、あるいは仲介の意味を含んでいたという〔新城1973 p.209〕。

また、登野城村の宮良善勝が公用で首里王府に出仕した際、首里郊外のアンニヤ村にいてチョンダラーから盆行事に歌う浄土宗の教えの道を説いた念仏を稽古して、これを少々改良改曲してつたえたのが八重山の無蔵念仏であるという〔喜舎場 1967 p.110〕。

このように八重山では支配者である士族が庶民に念仏を伝えている。森田も八重山における念仏者の存在は王府の政策的なものではなかったかという〔森田 2007 p.455〕。新城・森田によると、石垣島の伝承ではほとんど各字に一人ずつ念仏者がいた。各字の念仏者は人頭税、公事が免除されていた。葬式に参加する報酬としては、多くの場合各字所有の念仏田を耕作しその収穫物を得た。念仏田は殆ど旱害のない良い位置にあったという。大浜村では大正のころ、念仏者に対し報酬として50円を支給していたという。

（2）石垣島の念仏者

以下、石垣島の念仏者についてまとめてみたい。森田によると、昭和15年頃までは死者の出た家ではニンプジィ（念仏者）と称する者へ念仏鉦叩きを依頼していたという。念仏者は二番庭の正面庭や門口近くに幔幕や板などで日覆を作り、その内に鉦を吊るし、出棺間際まで、時々、

間をおきつつ鉦を叩いた。さらに、葬列の後方から鉦を叩きながら墓所まで従った。〔森田 2007 p.451〕。以下、宮城による。鉦は2,3分おきに鳴らされ、人々はその音色で何字（何村）のどこの家かも聞き分けた。八重山では葬式を『ピーピトイヌミチ』（一度しかない最後の日）といって重要視する慣習があり、念仏鉦の音を聞くと遠方まで尋ねあてて、普段交際のない家の葬式にも加わるといふ伝統的風習があったという。それは、会葬人の行列の長さで、葬式を価値づけ、某家の葬式の行列は墓までも届くほどの会葬人だったなどと評されたからである〔宮城 1982 pp.462・473〕。新城・森田・宮城も指摘しているが、念仏鉦の音は極楽を祈るための道具であったが、上述のように死亡通知の役割もはたしていた。

石垣市在住の宮良当房氏（1920年生まれ：宮良殿内19代目）は子供の頃見聞きした念仏者が鉦を叩く様子を次のように語った。

翌日の朝から鉦を叩いたんじゃないかな。外に日陰作って座って、ダビ（葬式：筆者）の日に一日中鉦を叩いた。そういう専門家が、商売にしているのがおった。商売でしょう、手間もらうから。各字におったんじゃないかね、一日中、叩いておってね。葬式の日、出棺するまでさ。入り口に小屋掛けして、その日だけの念仏小屋、あっちで叩いておった。だからダビのある日は朝早くから叩いてよ、それで合図みたいに、「今日はどこのダビかねー」って、うまくできておったよ。（叩くのはみんなに知らせるため？）そうでしょ。（叩く人はナミアミダブツといましたか？）わからん、子供の頃叩くの見ただけで、言うかも知れんね、最初に、言ったかもしれんね。お墓まで付いてきたと思う。お墓に着いても叩いていたと思うよ。坊さんもダビがすむまで、お墓に行くまでずっと。はっきり覚えておらんけど。

上記の宮良氏の言葉からは念仏者のいたころの葬儀の様子が伝わってくる。このように僧侶が葬儀に関与していても、葬列では念仏者が後方から鉦を叩き墓まで送った。森田によると、墓までついてきたニンブチャーは墓に着くと墓の口を開ける前に土願いを行い、また閉じるときにも行ったという。石垣島大川の事例であるが、墓口を開けるときの願詞を挙げる〔外間・宮良 1979 pp.45・46〕。

さりー、さりー、さりーうーとつ、くーとつ、うーとうくる、くーとうくるかみから、
しんり、まんりひびくかにうたば、きむうどうるぎ、むにうどうるぎ しーとーらんくに
し きゅーぬりっぱにあんりしめーとーり

（もし もし もし 大土地 小土地 大所 小所 上から 千里 万里に響く鐘<鉦>
打つから 肝驚き 胸騒ぎをしなさらずに 今日をりっぱにあらせてください）

また、石垣島大浜では、念仏者は墓口を開ける儀礼として次の念仏経を唱えたという。「キイ香、カイ香、クダキ香、タタキ香タカバ、受取りタボリ、肉ヤ地神チヌイシトウナリ、目玉ヤ天ニ上り南無アミダ仏、南無アミダ仏、南無アミダ仏」〔森田 2007 p.455〕。僧が庶民の葬式に参加するようになって、まだ念仏者のいた部落では、念仏者が墓の門口で土願いをしてから墓を開き、僧の読経の後、また念仏者が願い事をして閉めたというが、葬式と念仏者の願事

が密接な関係を持っていたと考えられるという〔森田 2007 pp.451・453〕。

昭和に入り公的な火葬場の出現に伴い、石垣島では鉦や龕の使用も生活改善の対象になった。鉦による供養は昭和15年頃に廃止され、以来、葬式の知らせは貼紙や新聞広告に改められるようになったという〔宮城 1985 p.463〕。

(3) 離島の念仏者

新城は“(念仏は)政策的配慮をも加味しながら各離島にまで広がり、念仏者は公的なものとして部落に存在することとなり”と記しているが、実際、石垣島以外の島々における念仏者の存在はどうだったのだろうか。

前述した『富川親方八重山島取締帳』には、“生活に困っているものは坊主を呼ばず経巾だけで済ますこと”とあった。では、経巾とは何か。沖縄では手拭のことをティサージと呼び、手巾と記す。つまり、経巾とはお経を書いた布のことと考えらる。石垣島に最も近い竹富島では今でも経巾の習慣がある。竹富島の喜宝院(浄土真宗本願寺流竹富布教所)の上瀬頭同子院主によると、経巾のことを竹富ではキョウサジといい、サラシに南無阿弥陀仏の名号を書いて、その両脇にお経の文字を書いたものであり、遺体の顔に被せる布だという⁷。上瀬頭院主は「キョウサジをかけたい」という遺族の要望があれば今でも書くという⁸。以上のことから考えるに、「富川親方八重山島取締帳」に記されている経巾とは、お経を書いた布であり、それで死者の顔を覆ったと考えられる。寺が遠いという理由などで僧侶を呼べない人々が、本来僧侶の念仏かわりに用いたものであろう。

このように、「富川親方八重山島取締帳」には僧と経巾については言及されているが、念仏者については言及されていない。念仏者の習俗は役人の関知しない習俗であったのか、あるいはごく当たり前の習俗であり、あえて記すに値しないと考えられていたのか、不明である。

以下、八重山の他の島々の念仏者について記す。運動武三『黒島誌』(1988年)には「昭和15年頃までは念仏鐘を叩いて部落民に死を知らせた」という記述がある〔運動 1988 p.143〕。黒島で最も大きい東筋部落では、「葬式にはナムマイダはない。坊さんは来ない」というが、「昔は廊下で鉦をずっと叩く人がいた」という。当山米子氏(昭和6年生まれ)によると鉦を打つ専門の人は伊古部落にいたという。ウクヤーのモイリザーと呼ばれていて、葬式のときはいつも呼ばれていたという。亡くなると遺体を二番座に寝かせ、その周囲には白黒の幕を張り巡らしたが、その幕のそばぎりぎりのところの廊下に紐で鉦を吊るして叩いたという。大工として葬式では棺桶作りにかかわったという神山善助氏(昭和11年生まれ)によると、鉦を叩く人は廊下の真ん中に座って、幕の外から内に向かって鉦を打ったという。氏によると、鉦を叩くのは葬式をやるという合図で、鉦の音を聞いてソウシキヤーだと人々は知ったという。「あれ響くよ。これ、また打つきまっとったからよ。専門家よ。名前はもうわからない。カネタタキと呼んでおった。昔から同じ人が打ってきてるから。もう自分が叩くって言う、しょっちゅう叩いているよ。あんなにうるさくない」と氏はいう。氏によると、鉦の音は“坊さんがお経読む

のと同じ意味” だといひ、カネタタキには御礼というのも別になかったという。黒島の葬式は、墓を作るのも棺を作るのも造花を作るのもみんなボランティアで、お金は1銭もかけなかったからだといふ。氏によると、“カネタタキ”は墓場まではいかなかった、墓での願ひは別の人がしたといふ。墓の口を開けるのはカドの年の人をあて⁹、墓を閉めるときは、願う人が願ひをしたといふ。願ひの内容は、「今日閉めるから極楽に迷わず成仏してください、上等に子や孫を見守ってください」だといふ。

昭和23年8月13日の八重山タイムスには、かつて黒島では伊古部落の伊古氏が葬式のとき鉦を叩いていたといふ記事がある¹⁰。この記事からは、昭和23年以前には葬儀には念仏鉦が使用されていたこと、念仏鉦の保管に関して問題があったこと、さらに、念仏鉦には特別の威力があると人々が考えていたことがわかる。伊古部落は黒島では糸満の居留民の部落といわれ、明治末から大正時代、八重山でカツオ漁が盛んになった頃、糸満系漁民の進出によってできた部落であり、その歴史は新しい。念仏鉦の習俗も彼らの出身地から伝わったものかもしれない。

黒島では、“カネタタキ”は墓場までは行かなかったといふので、石垣島の念仏者のように墓場における儀式には関与しなかったようである。しかし、黒島でも、墓を閉めるときに墓地で願う人がいたといふ。では誰が墓地で願ひをしたのか。東筋部落の当山氏は墓場では男性神役のチジリが願ひをしたといふ。仲本部落の宮本哲行氏（昭和21年生まれ）もチジリが願ひをしたといふ。最近ではツカサが願ひをしたこともあったといふ。「ツカサやチジリは神役なので葬式には関係しない」といふ人々もいるが、「願ひの言葉はできる人がやればいい」といふ人もいる。

竹富島では、「念仏は死骸を囲った幕の外側で鐘を打ちお経をあげる」〔亀井 1990 p.384〕といふ。また、入棺後の告別式では、「部落ごとに置かれた念仏係りが念仏を唱え、念仏鉦を鳴らして叩いた」〔上瀬頭 1976 p.128〕といふ。前述の上瀬頭院主によると、ネンブツガニを打つ人は決まっていたが、葬式があると一晩中鉦を打つので仕事も何もできないのといふことで、昭和26、27年頃に廃止されたといふ。葬儀は集落単位で役割分担（墓の掃除・家の掃除・料理など）をしてやるが、ネンブツガニだけはひとり（同じ人）が担当していた。ネンブツガニを叩く人には公民館から謝礼があったかもしれないといふ。

小浜島でも、昭和15、16年頃まで葬列がおとるときに、お経を上げながら鉦を叩いた人がいたといふ。小浜島の黒島時男氏（大正14年生まれ）によると、小浜島では鉦をションコンといひ、葬儀でションコンを叩く人を坊主さん、あるいは坊さんと呼んだ。氏が、4～5歳のとき、ションコンのお返しにお米を重箱いっぱい（5合くらい）もって行った記憶があるが、それは今のお布施にあたるといふ。氏によると、別れの盃の終わった後にお墓までションコンを叩いたといふが、通夜では叩かなかったといふ。小浜島ではお盆に一軒一軒回ってきて念仏をやるのをネンブチャといひたが、お盆のときの念仏とションコンのとき唱える念仏は違うものだといふ。

(3) 念仏者のいなかったと考えられる島

西表島の干立では公民館が中心となり村挙げて葬式を盛大に行うが、「昔からナミアミダブツも鉦もない」という。なお、干立と祖納の葬式はほぼ同じといわれている。干立のヤーモト(草分けの家)である宇保金善氏によると、平民と士族の葬式のやり方は違ったので、宇保氏自身も士族のやり方は分からないという。干立ではかつて60~70軒のうち9軒くらいが士族だったという。1875年に派手に行なわれるようになった焼香・茶毘の簡素化が命じられているが、それは士族やごく一部の百姓だけで一般の平民の葬式はごく質素であったと考えられる。

原知章『民俗文化の現在 沖縄・与那国島の「民族」へのまなざし』(2000年)には与那国島の葬送の詳細な記録がある。ここでは従来の龕による葬送が今でも行われているが、ニンブチャーの存在は無い。早朝、墓を開けるときには、ムヌチ(ユタ:原)が墓の神に対して墓口を開ける理由を報告し、次に祖先神に対して葬儀の行われることを述べる〔原 2000 p.117〕。墓に棺を納める際も、ムヌチは墓の神と祖先に対して拝む〔原 2000 p.126〕。なお、与那国島で現在のような葬送が行われるようになったのは、1900年頃からであって、それ以前は貧者は屍を棺に入れ、又は葦ムシロに包んでそのまま縄をかけて担いで墓地へ運んだという〔池間 1991 p.34〕

2. 波照間島の念仏者:サイシ

石垣島では1940年頃には生活改善のため念仏鉦の風習はなくなった。黒島、竹富島、小浜島、でも、1940年代から1950年代のはじめ頃にはなくなっている。しかし、波照間島では1980年代くらいまで、サイシと呼ばれる念仏者が鉦を叩いていた。勝連文雄氏(大正6年生まれ:以下、勝連氏と記す)は、現在、波照間島で葬式をやれなくなった理由のひとつはサイシがいなくなったためだという。波照間島の念仏者であるサイシについて筆者の聞き取りと文献から探してみたい。

(1) 波照間島の精神生活にかかわった人々

波照間島にはネガイピトという願い事のできる人々がいた。勝連氏によると、お墓の清掃をする場合、お墓の中を開ける場合、家を建てる時、工場を作るとき、事故を起こしたときには、「オッサレー」を三回唱え、眠っている土の神を起こし、「今日は~の日~」と内容を申し上げ、行事を行なうという。このようなオッサレーの願いの出来る人をネガイピトといった。「ネガイピトはユタと同じように願いをする人」(勝連氏)というが、さまざまな行事において願いをする人の総称を波照間島ではネガイピトと呼んだのであろう。

このように波照間島には人々の精神生活にかかわった人々がいた。もちろん、それで生計を立てていたわけではないが、島の生活にとって不可欠の存在であった。このような人々は、トキ、ヤブー、ユタ、ムヌシリなどであった。トキは波照間の暦トークルオンで結婚式や葬式等の日取りや時間を選んだ。ヤブーは島の医者であり、ブー(葶)で作ったひもで病人の手や足を縛り、首にもかけ、願いの言葉を唱えた。ユタは「ホトケ(死人:筆者)ともの言う人」と

いわれた。ホトケという言葉そのまま人々に伝えたという。口寄せに近いことを行っていたようである¹¹。波照間島におけるユタとムヌシリ、トキの区別については、筆者は資料不足のためその詳細はわからない。行事によってはその家の家長あるいは老人がネガイピトの役割をした。神行事にかかわるツカサやパナヌファ、葬儀にかかわるサイシもネガイピトの一員と見做すことができると考えられる。

特異な死に方をした人の慰霊にたずさわったネガイピトもいた。人が海で死んだときには、浜で竜宮の神に供物を備え、ネガイピトが願いをして、死者の魂を呼び寄せて墓に入れた。勝連氏は「Kというじいさんがああいうことをみんなやったんだ」という。具体的には、浜の石を3個持ってきて、死者の魂がこれに乗り移るように願い、石をお墓に持ってきた。この儀式はドゥングマチイという儀式であり、氏も戦死した兄のためにドゥングマチイを何回か行っている。アウエハントもその著書『HATERUMA 波照間 - 南琉球の島嶼文化における社会=宗教的諸相』の中で2回のドゥングマチイを報告している。アウエハントによると、2回のドゥングマチイにはイナマツカサが加わり、そのうちひとつはムヌシイシ（ムヌシリ；筆者）がネガイピトの役であったという。アウエハントの報告によるとこれらのドゥングマチイにはサイシは加わらなかったという。

以上をまとめると、村の農耕に関する神行事にはツカサ、死者に関する行事にはサイシ、ユタ、ムヌシリなどがかかわった。イナマツカサは航海安全を祈願するツカサだが、特別の死の行事であるドゥングマチイにかかわった。また、勝連氏によると男性のネガイピトが存在したようであるが、そのネガイピトとトキとムヌシリとの関係は不明である。

これらの職能者の報酬については、ユタ、ムヌシリ、トキなどには個人的に依頼者が支払ったと考えられるが、ツカサには所属する御嶽の人々が年2回5勺米を上納した。アウエハントによると、サイシはかつては個人的に頼まれて物を受け取っていたが、後に公民館が現金で報酬を支払うようになったという。

次に、いくつかの死者儀礼あるいは死に関する習俗の中で、それぞれにどのような職能者がかかわったのかをまとめたい。ユタ・トキの役割については、あまりお聞きすることができなかったが、前述したようにユタは“ホトケともの言う人”（勝連氏）と呼ばれていた。八重山には、49日の間に亡者の霊が巫女などに乗り移って「フダマリ」（口寄せ）をしたという報告がある〔喜舎場 1977 p.622〕。波照間島の方々にはお聞きできなかったが、波照間でもユタはこのような死者儀礼に関与していたと考えられる。トキは葬式や年忌、洗骨の日取りをとるので死者儀礼に関与したとみなした。サイシは葬式・洗骨・年忌（特に33回忌）にかかわった。サイシのかかわらない死者に関する行事は、ミダチイ（後述する）、7日ごとの焼香（49日は除く）、ソーリン（盆）であった。

（2）サイシの呼称と役職の継承

これらの役職の継承については、ツカサは決まった家系の親族の中から選ばれ、ユタ、ムヌ

シリ、ヤブーは才能のある人、あるいは神様から知らせのあった人、あるいは特定の家系がなつたと考えられる。そして、サイシは公民館がその後継者を捜した。

波照間島のサイシという呼称は比較的新しい。島の人々によると、サイシはポーズともニンブチャー（ネンブチャー）とも念仏とも呼ばれていた。勝連氏によると、「ポーズといったら卑しいからサイシとなった。まつりの師だな。昇格させたわけさ。これが学問の力。これやらないとみんないやというから、ポーズといわんでサイシとさせた」という。

では、どのようにしてサイシを選んだのか。勝連氏は、「波照間の人には葬式やれる立派な人間性の人をポーズに選ぶんですよ。そういう人を選んで葬式の第一の案内役とする」という。氏によると、サイシと呼称を変えたら、希望者が4名も出たという。その際、前任者が、「葬式は人間の一生に一回のものであるから」といって、その4名の中から後任を選んだという。最後のサイシは大正8年生まれで南部落のT氏であった。勝連氏の長男・隆生氏（昭和22年生まれ）によると、T氏が亡くなった後、公民館の役員が後継者を探そうとしたが探さきれなくて現在に至るという。候補者を探したが、「やだ、怖い」というのが人々の反応だったという。やりたいという男の人もいたが、葬式のときの飾り物などを家に保管するので家族が怖いといって反対したという。現在、幕は鉦と共に波照間島の公民館に保存してあるが、かつてこれらの道具はサイシが保管していた。（黒島・祖納では葬式の幕は持ち回りで、葬式があった家が次の葬式があるまで保管しておいたという。）

3. 波照間島の葬送とサイシの役割

現在ではほとんどの人が石垣の病院で亡くなる。そのため、石垣で葬儀が行われ遺体は火葬される。しかし、かつて葬送は島の中で島の人々の手によって行われた。ここでは、かつての波照間島の葬送の概要を述べ、サイシがどのような役割を担っていたのかをみていきたい。

(1) 波照間島の葬送の変遷

昔は人が死ぬと牛や豚を殺し、にぎりめしと共に会葬者に配り、出棺のとき牛の血と豚の血を入れた汁を一同に配ったが、これを血鍋といった〔酒井 1954 p.58〕。貧乏人は牛を持たないので田畑と牛を交換したという〔宮良 1972 p.80〕。しかし、勝連氏は「葬式のとき牛を殺したのは大昔さ。牛というのはお米作る大事な農具さ。牛は勝手には殺されん」という。

波照間島では明治30年代後半までは、葬儀は近親のみで行われていた。葬儀に他人が会葬するようになったのは明治37年（1904）の日露戦争戦死者の葬儀以降であった¹²。波照間村事務所に残る「島庁通達綴り」の「第945ノ一号」（明治37年6月6日受付）には¹³、「出征軍人戦士又ハ傷病死者葬式ニ関スル件」として、出征軍人名譽の戦死の葬式では“同情ノ意ヲ表スル為メ”、小学校教員または生徒のうち幾分かはなるべく会葬、間切吏員、間切会議員は必ず会葬のことという通知がある〔竹富町史編集委員会 2009 p.140〕。明治37年12月5日の琉球新報の「波照間通信」には、当時の波照間島の葬儀について次のような記事が掲載された。「由来該島に於ては

病人を見舞いに行く者は直ちに伝染し死者を音なうものは必ずわが身の上に不幸来るものと迷信し大に之を忌避して他人は全く立ち寄りざる奇風あり。為に葬儀のごときは単に近親の者のみにて之を挙行するとのことなりければ……」〔竹富町史編集委員会 1994 pp.165・166〕。この“奇風”が変化したのは、明治37年7月に日露戦争で戦死した銘刈真勢の葬儀からだった¹⁴。銘刈真勢の葬儀は島司、村頭の参列の下、名誉ある戦死者として島民挙げての参列で葬儀が盛大に行われた。前述の新聞報道によると、この機会に葬儀の迷信打破を島の代表者たちを召集して説得したので、この葬儀の後このような弊習も一掃されたという。勝連氏が兵隊に行くころに2名の戦死した若者の村葬があったというが、島あげての葬儀で、葬列は人々の列が家から墓地のほうまで続いたという。

大正時代の末に行われた勝連氏の祖父母の葬式は親戚が中心になって行い、特に通夜は親戚だけで行なわれた。朝から出棺まで女の人がずーっと泣いていて、泣き声はかなりのぎやかだったのを子供心に覚えているという。浦仲浩氏（大正15年生まれ）によると、葬式では分家や嫁や子供たちも集まってきて声を上げて泣き、送りのときもずっと泣きながらいったが、「あれは見苦しいといってやめた」という。

1945年の敗戦で島の人々が疎開先の南風見から帰ってきてからは、島中の人々がマラリアにかかり葬式が続いた。男性は毎日、順番で死体を埋める穴掘りに従事した。波照間島では死の忌みは厳しい。葬式が出るとしばらくは神行事には参加できなかった。特に、神行事の役員を務める人は3年間自分のうちで穢れがない人という条件があった¹⁵。しかし、敗戦直後は全員が喪中であるからどうするかという問題が起こった。神行事はやめることは出来ないので、みんなで忌みを改正して神行事を続けたという。敗戦後でも少し落ち着いた頃に行われた勝連氏の父親の葬式には100名もの会葬者が集まったという。

では、波照間島では念仏者はいつごろから葬送に関与していたのだろうか。明治37年以前、葬儀は近親のみで行われていたという。波照間島では“死者を音なうものは必ずわが身の上に不幸来るものと迷信し大に之を忌避して他人は全く立ち寄りざる奇風あり”というが、このような習慣は八重山一帯で行われていたと考えられる。竹富島には死人の家に入るときの呪文があり、この呪文を門前で唱すれば死者の霊はその人に災いをもたらさないという〔上瀬頭 1976 p.267〕。このように、死者を忌避して葬儀に他人が全く立ち寄らなかった時代に、念仏者が知らせの鉦を叩く必要があったのだろうか。前述したが、与那国島でも龕を用い、花（造花）を送り、葬送順が行われるようになったのは1900年頃からであったという〔池間 1991 p.34〕。明治の近代国家によって葬儀は親族のみで行われる葬儀から一般会葬者を含む“みせる葬儀”に変わった。家族のみで行われていた葬送が、人々にみせるための葬送に変化したとき、“みてくれ”を考慮して念仏者が必要とされたのではないだろうか。八重山の離島における念仏者の受容は、王府の政策というよりは、明治政府によってもたらされた葬儀の変容に因るという可能性も否定できない。

(2) 波照間島の葬送の実際

波照間島では、葬送はタビ、あるいはダビといった。波照間島の葬送については、酒井卯作「波照間島調査報告」(『日本民俗学』第2巻第2号収録 1954年)、宮良高弘『波照間島民俗誌』(1972年)、住谷・クライナー「パティローマ(2)」(『思想 No.616』収録:1975年)、加屋本正一『波照間島』(1978年)、アウエハント『HATERUMA 波照間・南琉球の島嶼文化における社会=宗教的諸相』(2004年)、本田昭正編『波照間島の歴史・伝説考-仲本信幸遺稿集』(2004年)などに報告されている。本稿では、勝連氏の話をも島の人の語りでも補いながら、かつての波照間島における葬送について記し、サイシの役割についてみていきたい。

病人が亡くなると、その家の長女が軒をつかんで、亡くなった人の魂を3回呼ぶ。これをタマシヨビ、タマツアビー、あるいはタマチャビルという。母親が亡くなったなら、「お母さん」と3回呼びかけ、返答がなければ、「アガヤー、シサンタリヤー」(ああ、死に切ってしまったなあ)といって泣き始めた。分家や嫁や子供たちも集まってきて声を上げて泣いた。

勝連氏の祖父母の時代は、朝から出棺まで女の人が3人くらいで交代で泣いていて、泣くの歌みたいをやったという。「アガヤー、アガヤー」と泣きながら言い、「苦しさの、苦しさの」と、泣いてものを言ったという。崎山千代氏(大正7年生まれ)は、「女が泣くさ、男の人は泣かない」といい、泣く時間も決めてあったようだという。さらに、死んだときうたう歌もあったという。

裏座に寝ていた遺体を仏間の二番座に移し、畳の角を十文字に並べ変える¹⁶。二番座の一番かどの畳を上げて、マーニの葉を下に敷き、その上にさらに筵を敷いて、筵の上で遺体を洗う。髪を整え、きれいな着物を着け¹⁷、仏壇の前に仰臥させる。白布で顔を覆い、仏壇の前にイベ(白位牌)を置き香をたく。部屋には黒い幕を張る。

棺を作るのは大工仕事のできる人なら誰でもいい。だが、最初はカドのいい人が手をかける。男の人は紙で造花を作り、位牌の周辺を飾った。提灯、笠も作った。花、提灯は墓の外、笠は茶碗などと一緒に棺の中に入れた。死者があのお世で使用するものだという。庭では米あるいは粟を少々臼に入れ、二人で杵でコンコンと音を立てて搗き、水で練って紙に包み布でしばって遺体の脇の下に挟んだ(頭のそばともいう)。これをスツツルモチといった。グショーに行って食べるものだというが、野辺の送りの後の別れの儀礼で形式的に食される餅もそのような名(スツモチ)でよばれた。

遺体は長くは置けなかった。翌日には葬式が行われた。死体は棺に入れられ一番座に移され、別れの杯が行われる。それぞれ思い思いに別れの言葉をかけながら死者の唇を湿らせた。本比田トヨ氏(大正10年生まれ)は祖母の葬儀のとき(氏は5.6歳だったという)、祖母のいところが棺の中の祖母の遺体の前で、もうお別れと歌をうたった記憶があるという。「まだまだ葬式にいかないときによ、泣きながら歌われてたよ」というが、入棺後、墓地へ送る前のことであるう。

7歳以上はガンダラゴウといって、昔の王様の籠のようなものに載せた¹⁸。百姓は一日でも王

様の籠に乗ってあの世に行きたいからだという。石垣では一日中念仏者が鉦を叩くが、波照間では入棺と出棺、葬列のときに鉦を叩く。勝連氏によると、サイシは「ナミダンブーツ、ナミダンブーツ」「イーミツ、イーミツ、ソーミツ、ソーミツ、ダクミツ、ダクミツ」と調子をとって念仏を唱え、鉦を叩いたという。

各部落では神道と重ならないように、また御嶽の前を通らないように葬式の道が決めてあった。行列の先頭はカドの人になった。先頭の人は刀を持って、牛が繋がれていて道を邪魔している場合は、その刀で縄を切った。悪いものが死んだ人に悪さをしないように、ガンダラゴウの前に龍頭を作って付けたが、龍頭もカドの人が持った。身内は真っ白い手拭を被った。亡くなった人が73歳以上だと、身内の周囲を白い布で囲った。これを内幕といった。葬送のときもサイシはガンダラゴウの前に歩きつつ念仏を唱えながら鉦の音で案内した。ガンダラゴウの次にサイシが鉦を叩いて念仏を唱えたともいわれる。前述したが、送りのときも女性たちはずっと泣いていたというが、後に廃止になった。葬式の行列ではお米や塩を撒いたともいう¹⁹。

墓地に着くと棺と葬式用の小物を玄室に入れる。墓を閉めてから、墓地に供物を並べ親戚一同が別れの願いをする。このときサイシは、「グショーはこちらです、こっちからいったん出たら大変です」といい、ここがあなたのいる場所だから戻ってこないようにという。さらに、勝連氏によるとサイシは、「人間は死んだら、血は水になり土に吸い込んでいく、骨は石ころになる、肉は土になる、メンタマ、魂は天国に上がる」と願うという。

送りの後、海に行って潮水を9回かけて体を清めた。後にはカドの人がたらいに水を入れて、塩を入れ、門に用意しておくようになった²⁰。清めたあとの水は門の西側の外に捨てた。乳飲み子が死んだときは、子供が乳を飲みにやってくるかもしれないので秘密に宿を移した²¹。

墓にいかない人は、家を掃き、餅と塩粥を作った。帰宅後、家人が儀礼的に口にする餅はスツモチといった。崎山氏と新城永裕氏（昭和23年生まれ）によると、スツモチは小指より小さく丸めた生餅で、10個くらい作って皿に入れたものが家人に回ってくる。ちょっとだけ口につけて食べるふりをした。塩粥も椀に口をちょっとつけるだけだったという。餅も塩粥も食べるものではなくて儀礼的な共食だったことがわかる。崎山氏はこの共食を、「生きている人との別れ」だという。

沖縄各地では亡くなって3日目に墓に行って死んだ人の名前を呼ぶというという習俗があった。八重山一帯では3日目をミーダチあるいはミダチと呼び²²、この日、忌みを祓うためさまざまな習俗が行われた。波照間島ではこの日はミダチと呼ばれた。崎山氏によるとミダチは家族でなくて別の人、日取りのいい女の人が白い着物を着て行ったという²³。ご馳走をもって墓に行き、墓に石を3つ投げつけ死んだ人の名前を呼んだ。名前を3回呼んで、返事がないと「ああもう死んでしまった」といって泣き始めた²⁴。酒井によると、ミダチの日に小砂・灰などを芭蕉の葉に載せて門におくと、死人が来たら、その葉の上に死人の足跡が残るといわれていたという。火葬の普及していなかった時代、人々は死者が生き返るのではないかという不安を常に持っていたことは理解できる。しかし、この習俗は単なる死の確認ではなかったと考え

られる。その日は帰宅する時に家の後壁を叩いてから家に入るものとされていた〔酒井 1954 pp.60・61〕。音をたてて家の壁を叩くという行為は祓いも意味する。ミダチの儀礼は死者が生き返ったかどうかを確かめるという意味だけではなく、死者と完全に別れて家を祓い清めるという意味があったと考えられる²⁵。

その後、1週間おきに焼香が行われ、49日の焼香で終わる。49日は死者の魂との最後の別れでタマチバーリイ（タマチバガリイ）が行われる。崎山氏によると、タマチバーリイは、焼香のとき親戚が集まり、ご馳走を作ってちゃぶ台において、お米と水を供え、家族との別れをするという。最後に、「もうこれでお別れです」といって、水を門のそばにこぼしてくる²⁶。アウエハントによると、この日、サイシは紙の位牌と弔旗を燃やし、永久的な位牌を仏壇に安置するという〔アウエハント 2004 p.332〕。

以上の葬送の流れをみるに、死者、およびその魂との別れの儀礼は、亡くなってから49日までに、数回にわたって行われていることがわかる。①通夜から入棺・出棺をへて墓地に送るまでの儀礼（別れの盃、墓地でのサイシの願いなど）、②墓地から帰り家人がスツモチと塩粥を食べる儀礼、③3日後のミダチ、④焼香（49日）におけるタマチバーリイの儀礼、である。このなかで、サイシが関与するのは主に①の死者の遺体との別れであり、死者の魂との別れではない。

4. 波照間島の葬送におけるサイシの役割

波照間の葬送におけるサイシの役割についてまとめ、その意味について考えたい。さらに、サイシが関与したことによって、葬送はどのように変容したのか、サイシの関与と葬送の変容について考えたい。

（1）葬送におけるサイシの役割

サイシは鉦を叩き念仏を唱えた。ではサイシはどのように念仏を唱えたのだろうか。勝連氏は、「お経（念仏：筆者）はみなナミアミダブツさ」といい、「ナミダンブツ、ナミダンブツ」と“音符をつけながら”鉦を叩くという。さらに、「イーミツ、イーミツ、ソーミツ、ソーミツ、ダクミツ、ダクミツ」と唱えるという。念仏の文句については勝連氏もこれ以上覚えていないようだが、念仏の内容よりも、鉦を叩きながら呪言を唱えることが人々には大切だったのであろう。勝連氏によると、「鉦はお経（念仏）と結びついて、みんなの心を一致させる。パーンとなって、みんなの精神をクワーっとまとめます」という。では、どのようなときに鉦を叩くのか。勝連氏と浦仲氏によると、鉦を叩き念仏を唱えるのは、入棺、出棺と送りのときであった²⁷。

念仏者は鉦を叩き、念仏を唱えるだけではない。死者にあの世のことを語りかける役目もした。入棺するときは敬意を払ったしかも親しみをこめた言葉で、死因と親戚たちの最後の心遣いを述べ、「今、あなたはウヤピイトウになられたので、精一杯立派な葬式を行っています。私

たちはあなたを、後生への大いなる道、広い道、より楽な道を通り、あなたのお墓、ウヤピイトゥがいらっしやる場所に送ろうとしています。どうか、安んじて葬式をしてもらい、何一つ迷うことなく送られてください」と語った〔アウエハント 2004 p.325〕。さらに、墓を仮閉鎖したあとサイシは死者に次のように語りかけるという。「ゴシヨウ（グシヨウ：筆者）には楽に入れるよき道があるとあなたにいったが、後生には何千、何万の道も無く、よき楽な道などありません。グシヨウに関する限り、墓こそがグシヨウなのです。あなたはそこから現れてはなりません。起き上がってあなたの家に行き、子孫たちに会ったり、村に来てはなりません。さまよいあるいてはなりません。あなたはもうプトゥギなのです。あなたは今ウヤピイトゥの腕の中で眠っています。今からは、供養のときが来たたらあなたを迎えに参ります。（それまでは）（他の）プトゥギの腕の中にいて極楽への生活を模範的に送ってください」〔アウエハント 2004 p.326〕。勝連氏によると、「今までは家族と一緒にメシを食べたが、今からはあんたはグシヨウの人になっている。極楽はここなんだから、普段はここから1歩も出ることはできない。うちから焼香とかお盆とか連絡があった場合以外は、こっちから出ることはできない」といって、「バンとおさえる」という。

墓地では、サイシは土の神（波照間では、地の神、土地の神、地面の神などともいわれる：筆者）に願いを述べる。勝連氏によると、波照間島では土地のジョウヒラキ、シメルなどのときには土の神に願いをしなければならぬので、葬式に際してもネガイをするという²⁸。

（2）サイシの役割の意味

人は死を目前にして、改めて生と死の境界の危うさを認識する。死は自らの隣り合わせであり、いつ死の世界に引き込まれるかわからないという、生のもろさを感じる。そのため、生きている人々は死の世界に引き込まれないように、生と死の境界を強固にし、死者を順調に死の世界に送るためさまざまな儀礼を行ってきた。葬送では、生と死の境界を明確にし（畳を組換えて真っ直ぐにする、死者を囲む幕を張るなど）、さらに呪力のあるもので防御行為（湯かんのときに呪力があると見做されているマーニの葉を敷く、カンカンと音を立てて餅をつく、鉦を打ち念仏を唱える、号泣するなど）が為される。生と死の境界を明確にし、呪力を持つもので防御行為をすることは、生と死の境界を強固にし、順調に死者を送る手続きとみられる。鉦を叩き念仏を唱えるのは、入棺、出棺と送りのとき、つまり死体の移動の時であった²⁹。移動という境界の最ももろいときに、鉦が叩かれ念仏が唱えられたといえる。

特に葬列に際しては、ワルモノ（勝連氏による）がやってきて、生きていたり亡くなった人に悪さをすると人々は考えていた。勝連氏は葬列ではお米や塩を撒いたという。「ワルモノは乞食だから美味しいものがあると拾う」「お米を投げて通るとね、あれは細かいですよ。数が多いから、（ワルモノが：筆者）あれを拾っているうちに行列は無事に通る」という。ガンダラゴウの前の龍頭はワルモノが死んだ者に悪さをしないようにと付けるという。葬列で号泣しながら歩きつづけるのも、龕の近くで叩かれる鉦の音と念仏もワルモノに対する防御行為であった

と考えられる³⁰。

ではなぜ、鉦を叩き念仏を唱えることが呪力を持つと考えられたのか。現在、波照間島の盆の後に行われるイタシキバラではドラを叩きながら集落を回り、身寄りのないホトケ・ガキドモ（勝連氏による）を追い払い集落の厄払いと浄化を行っている。このように音を立てて集落を浄化する習俗は筆者の調査では八重山の他の島々でも見ることができる³¹。盆や節祭にはドラを叩きながら家々を回り、一時的にやってきた本来帰るべき魂を追い払うのである。目に見えないまがまがしいものは大きな音を出すことによって追い払えると信じられていたのである〔古谷野 2010 p.303〕。鳴り響く鉦の音もそのような呪力を持つと考えられたはずである。

サイシは死者に語り掛ける役割も果たした。どのように死者に語りかけたのだろうか。アウエハントによると、出棺前は、「何一つ迷うことなく送られてください」と優しい口調であるが、墓を仮に閉めた後は、「あなたはそこから現れてはなりません。起き上がってあなたの家に行き、子孫たちに会ったり、村に来てはなりません。さまよいあるいてはなりません」と厳しい口調である。勝連氏によると、「こっちがあんたのグショーですよ。こっちから一步も出ることはできない。しかし家から合図があった場合はお供しますからいらっしゃい」と、「前もってピシャという」という。墓を閉めた後は厳しい口調である。これらの厳しい言葉は、「行く先や後に戻らん」（死者）は戻ってはいけない」という意味なのである。干立の通夜では泣きながら、「二度とくなよー」などといい、棺のそばには、「行く先や後に戻らん」と書いた旗を付けるという。このような禁忌の存在は八重山の葬儀のときの人々の言葉の中にも見ることができる。別れの盃のとき、黒島では「グソーの道をゆがまないで通って行って」「迷わないで極楽まっすぐ行ってください」「振り向かないで極楽行ってください」、竹富島では³²、「アトウンケーリ（後戻り）しないでください」「ミーマイ・カドマイしないでください（自分の身の回りにウロウロしないでくださいの意味）」「畳の目のようにまっすぐお進みになってください」、小浜島では「グソーの道を真っ直ぐ通ってください」などとという。これらの言葉に見られるのは、干立の「行く先や後に戻らん」という禁忌であり、口に出して死者にこの禁忌を述べることは、死者を迷わずグショーに送る一種の呪術的行為であったともいえる。波照間島では最終的にはサイシが代表して死者にこの禁忌を述べた。

サイシは墓地で願い事をした。石垣島でも、念仏者は墓に着くと墓の口を開ける前に土願いを行い、また閉じるときにも行ったという。沖縄では墓に向かって右側にヒザイヌカミと称して土地の神がいると考えられていて、葬式では墓の土地の神にいろいろ供え物をして祈願をするという〔名嘉真 1989 p.240〕。波照間島では墓地では地の神に祈願するというが、勝連氏の話では、波照間の地の神は、土の神、地面の神であり、また守墓神でもあるようである³⁴。窪によると、「（八重山では）17世紀から18世紀前半にかけての頃には、農業神、土地一般の神、守墓神を合わせた性格の神として中国の土地神を受容したにちがいない」〔窪 1981 p.322〕というが、サイシは中国伝来の習俗である守墓神への祈願も行っているといえる。森田は、墓の門口で土の神に願い事をするのは、「土地神に対する仲介を意味するものであったと思われる」

〔森田 2007 p.454〕と記しているが、まさしくサイシは“土地神に対する仲介”を行っていた。

以上をまとめると、葬送におけるサイシの役割は、生と死の境界の最ももろいときに鉦を叩き念仏を唱え生と死の境界を強固にすること、死者にグシヨーの道を語りかけ、「行く先や後に戻らん」という禁忌をしらしめること、墓地で土の神に墓地を使用する許可を得ることであった。そしてサイシの仕事は洗骨を経て、33回忌に位牌を焼く役目で完了した。

(3) サイシの関与による葬送の変容

では、サイシが葬送に関与したことによって、葬送はどのように変容したのか。また、サイシが関与できなかったことは何なのか。

いくつかの葬送習俗の消滅にはサイシが関与していると考えられる。まず女性たちの泣く、あるいは号泣するという行為、泣きながらうたうという行為について考えてみたい。女性たちが泣く、あるいは号泣するのは、通夜・入棺・出棺・墓地までの送りのときである。前述したが、死体の空間移動の時であり、生と死の境界の最ももろいときであった。ここでは墓地までの送りを例にとってみたい。喜舎場によると、旧来の葬列は家族・近親者は付き添いの肩にもたれながら大声でしかも悲哀なるよく揃った調子の型にはまった泣き声で、鼻汁を長く垂らしながら墓場まで泣き続けていったという。その泣き方も一番先頭のものが「アガヤー」と泣声を発すると、それに合わせて次の者たちも同一様に「アガヤー」と泣き、交互に泣きながら墓所まで行く。この行列は念仏の鉦を叩く者と風呂敷を被っていく婦女子の哭声とで一種異様な哀調を帯びて悲哀であるという〔喜舎場 1977 p.619〕。ここにみる女性たちの泣き方は単なる悲しみの表出だけではない。それが必要とされていたからであり、泣くことに意味があったからであろう。泣くという行為は、死者を順調にあの世に送るための魔除けの役割を果たしていると考えられていたのであろう。なお、泣き歌にも同じような力があると考えられていたはずである。結果的には泣くという行為は波照間島では見苦しいといって廃止になったが、念仏と鉦だけのほうが泣くという行為よりもみてくれがいいと人々が判断したためであろう。

サイシは死者に語りかける。死者に語るのは、「行く先や後に戻らん」という禁忌であり、この禁忌を言葉に出して述べることは、黒島では“クチカザリ”とよばれるように、儀礼的な呪術でもあったと考えられる。このような禁忌規は、鳥々の別れの盃で見られるように、本来、家族や親戚などが述べたものと考えられる。サイシの葬儀への関与と共に、その役目はサイシが代表して行うようになっていったのであろう。

もちろん、人々の死者への語りかけや、泣くという行為、泣き歌の消滅の原因のすべてがサイシの葬送への関与に帰されるわけではないが、結果的にはその一因となったと考えられる。泣き歌（哭きうた）に関しては酒井正子『奄美・沖縄 哭きうたの民俗誌』（2005年）があるが、泣き歌の残っている地域には念仏者はみあたらない。

葬送にサイシが関与したことによって、願いの職能者の役割分担が変化した。森田は、念仏

者が行った土祭りの司祭（地の神へのネガイ）は伝来以前から行われていたものが念仏と結びついたのではなかろうかという〔森田 2007 p.454〕。現在、念仏者のいない黒島や与那国ではムヌシリやチジリ、ツカサなどの願いの出来る人が墓地で土の願いを行っている。波照間島でも、本来このようなネガイピトが墓地で土の神への願いを行っていたのであろう。ところが、サイシという葬送にかかわる職能者の登場によって、その役目はサイシに担われるようになったと考えられる。

ではサイシは葬送において何を引き受け、何を引き受けなかったのか。前述したが、死者、およびその魂との別れの儀礼は、亡くなってから49日までに、数回にわたって行われていた。そのなかで、サイシが関与したのは主に葬儀における死者の遺体との別れであり、口よせのような死者の魂との別れではなかった。死者の魂との別れのような呪術的な儀礼や習俗にはサイシは関与しなかった。

まとめとして

八重山においては、石垣島では葬儀に念仏者を招いたが、他の島々では葬儀における念仏者の受容はさまざまであった。いくつかの島の事例をみただけであるが、どこの島の葬儀でも一律に念仏者が関与していたわけではなかったようである。また、念仏者の担った役割も島によって多少異なっていたようであるが、基本的には出棺前から墓地までの葬列で鉦を叩き念仏を唱えた。

波照間島では、「今はサイシがいないから波照間では葬式ができない」といわれるが、サイシは単に鉦を叩き念仏を唱えるだけでなく、死者をグショーに送るという役割を果たしていた。具体的には、鉦を叩き念仏を唱えること、入棺時と墓を閉めた後に死者にグショーの道について語りかけること、墓地で土の神に願いをすることであった。

サイシは生と死の境界の不安定性念仏と鉦の音で強化した。鉦の音と念仏は順調にあの世へ死者を送る呪力があると考えられていた。入出棺時や葬列の際に鳴らされる鉦の音と念仏は、号泣や泣き歌と同じく魔除けの役割を担っているとみなされていたと考えられる。そのため、最初は女性の号泣や泣き歌と共に鉦が叩かれ念仏が唱えられていたが、号泣や泣き歌が廃止された後には、念仏者の鉦と念仏だけが残った。明治政府によって八重山では一般の人々の間でも、葬儀は親族のみで行われる葬儀から一般会葬者を含む“みせる葬儀”に変わったのだが、女性たちの号泣や泣き歌に比べてサイシの叩く鉦は見苦しくないと判断されたのであろう。このように、念仏者は、単に僧の代わりに葬儀において念仏を唱え鉦を叩いただけでなく、従来、家族・親族・会葬者などが行っていた葬儀における魔除け、祓いの行為を代行、あるいは代表して行った。念仏者を受容した人々は、自分たちが行っていた魔除けの習俗を念仏者に託したのである。さらに、死者をグショーに導くために語りかける別れの言葉も念仏者が代表して述べるようになった。

また、墓地における土の神への願いなど願いの専門職能者が行っていた役割も引き受けたの

である。念仏者は葬儀の専門職能者であり、単なる僧侶の代理ではなかった。サイシという葬儀の専門職能者の登場によって、葬儀における魔除け、祓いの行為はサイシに任された。人は号泣しなくなり、うたわなくなり、以前よりも死者に語らなくなった。サイシの関与によって“見せる葬儀”としての体裁を整えたのである。

このように、サイシの関与によって、一部の葬送習俗は変容した。この変容を助長したものは、近代国家における“見せる葬儀”の奨励であった。波照間島で念仏者がいつごろ受容されたのかは不明である。しかし、波照間のような孤島においては、明治政府によって親族のみで行われていた葬儀が一般会葬者を含む“みせる葬儀”に変わった頃のことであったと筆者は考える。もちろん王府時代から焼香・茶毘が派手になったという記録は残っているが、それはあくまで士族（役人）や一部の豊かな人々のことであったと考えられる。

サイシが代行できなかったのは、ミダチやタマチバーリイのような呪術的な習俗であり、これらはカドの人や家族が行ってきた。このように、死に関する習俗には仏教民俗が代行できる習俗と代行できない習俗があることがわかる。しかし、これはあくまでも筆者の推論であり、人々の霊魂感、死に対する観念など、さらに様々な視点から考えなければならない。また、本稿では洗骨・墓制等については扱わなかった。これも今後の課題である。

《謝辞》

お話を聞かせてくださった波照間島の勝連文雄氏・崎山千代氏・勝連隆生氏・浦仲浩氏・新城永裕氏、本比田トヨ氏、黒島の宮善哲行氏、当山米子氏、神山善助氏（石垣在住）、竹富島の上瀬頭同子院主、西表島干立の宇保善金氏、小浜島の黒島時男氏に感謝いたします。また、いつも調査の便宜をはかってくださる波照間宮子氏と小浜島民俗資料館に感謝いたします。

《参考文献》

- ・新城敏男 1973年 「宗教（2）仏教の伝播と信仰」『八重山の社会と文化』 木耳社
- ・池宮正治 1990年 『沖縄の遊行芸・チョンダラーとネンプチャー』 ひるぎ社
- ・池間栄三 1991年（1959年初版） 『与那国の歴史』 池間苗
- ・石垣市総務部市史編集室 1991年 『石垣市史叢書1 慶来慶田城由来記・富川親方八重山島諸取縮帳』 石垣市役所
- 1998年 『石垣市史叢書8 参遣状抜書上巻』 石垣市役所
- 1994年 『石垣市史叢書6 山陽姓大宗系図家譜 上宮姓大宗系図家譜 長栄姓小宗系図家譜 錦芳姓小宗系図家譜』 石垣市役所
- 1999年 『石垣市史叢書13 八重山島年来記』 石垣市役所
- ・上瀬頭 亨 1976年 『竹富島誌 民話・民俗編』 法政大学出版局
- ・運動武三 1988年 『黒島誌』 私家版
- ・亀井秀一 1990年 『竹富島の歴史と民俗』 角川書店

- ・加屋本正一 1978年 『波照間島』 私家版
- ・喜舎場永珣 1977年 「八重山列島の葬礼習俗」『八重山民俗誌』612～636 沖縄タイムス社
- ・窪 徳忠 1981年 『中国文化と南島』 第一書房
- ・古谷野洋子 2010年 「八重山のカママーリに関する1考察 - 波照間島の事例から - 」『沖縄文化研究 36号』275～316 法政大学沖縄文化研究所
- ・コルネリウス・アウエハント 2004年 『HATERUMA 波照間 - 南琉球の島嶼文化における社会=宗教的諸相』 榕樹書林
- ・酒井卯作 1954年 「波照間島調査報告」『日本民俗学 2-2』43～61 日本民俗学会
1987年 『琉球列島における死者祭祀の構造』 第一書房
- ・酒井正子 2005年 『奄美・沖縄 哭きうたの民俗誌』 小学館
- ・佐喜真興英 1925年 『シマの話』 郷土研究社
- ・島尻勝太郎 1978年 「ネンプチャー」『沖縄の外来宗教 - その受容と変容 - 』183～215 第一書房
- ・島袋源七 1927年 『山原の土俗』 郷土研究社
- ・住谷・クライナー 1975 「パティローマ(2)」『思想 No.616』75～95 岩波書店
- ・竹富町史編集委員会町史編集室 1994年 『竹富町史 第11巻資料編 新聞集成第I』 竹富町役場
2001年 『竹富町史 第11巻資料編 新聞集成第IV』 竹富町役場
- ・竹富町史編集委員会 2009年 『竹富町史 第10巻 資料編 近代5 波照間島近代資料集』 竹富町役場
- ・田場由美雄 1992年 「沖縄のニンプチャー・チョンダラー」(『漂白する眼差し』243～299 新曜社
- ・名嘉真宜勝 1989年 「沖縄の葬送儀礼」『環中国海の民族と文化 第3巻 祖先祭祀』223～252 凱風社
- ・名嘉真宜勝・恵原義盛 1979年 『沖縄・奄美の葬送・墓制』明玄書房
- ・原 知章 2000年 『民俗文化の現在 沖縄・与那国島の「民族」へのまなざし』 同成社
- ・外間守善・波照間栄吉 1997年 『琉球国由来記』角川書店
- ・外間守善・宮良安彦 1979年 『南島歌謡大成 IV八重山編』角川書店
- ・本田昭正編 2004年 『波照間島の歴史・伝説考 - 仲本信幸遺稿集』私家版
- ・森田孫栄 2007年 「葬制」『石垣市史 各論編 民俗 下』443～487 石垣市役所
- ・宮良高弘 1972年 『波照間島民俗誌』 木耳社
- ・与那国町史編纂委員会事務局 2010年 『与那国町史第二巻 民俗編 黒潮源流が刻んだ島・
どうなん 国境の西を限る世界の、生と死の位相』^{トコロジ}与那国町役場
- ・読谷村史編集委員会 1995年 『読谷村史第4巻資料編3 読谷の民俗上』読谷村役場

注

- ¹ 袋中上人は浄土宗名越派の僧で、琉球に3年間滞在し『琉球神道記』を著す。
- ² 袋中上人の弟子・儀間真常によって那覇市稲垣を中心にして各地に広められた念仏もある。
- ³ チョンドラー芸能とニンプチャー芸能は両者分ちがたく混在していた〔池宮 1990 p.32〕。
- ⁴ 『参遣状抜書』は首里王府からの布達書である参状と八重山蔵元からの報告・問合せなどの遣状からなる往復書簡集である。
- ⁵ 沖縄島で歌われていた念仏歌と、盆に八重山でうたわれている（いた）念仏歌は全く同じというわけではない。池宮は沖縄島では念仏歌を僧侶のお経がわりに死者の枕元でうたったり、葬送、墓前、彼岸や年忌にもうたったというが、現在、八重山でこれらの念仏歌が歌われるのはお盆のときであり、集落の行事のアンガマでは各家々を廻ってうたわれる。
- ⁶ 家譜とは家の系図で、その家の代々の功績等を記したものである
- ⁷ 与那国の葬式では死者の顔にチラヌサァディと呼ぶ6尺（7尺ともいわれる）の麻布（かつては芭蕉布だったという）を折りたたんで被せる。チラヌサァディを被せるのは「与那国にはお坊さんがいないからお経のかわりにやっている」「よそにもどこにもいかんでまっすぐグズまで行きなさい」という意味があるという〔原 2000 p.115〕。『与那国町史第二巻 民俗編 黒潮源流が刻んだ島・どうなん 国境の西を限る世界の、生と死の位相』にはチラヌサァディの^{トボロジ}写真が掲載されている。写真によると、布の中央には「南無本師釈迦牟尼大覚世尊」、その両脇には「南無文殊菩薩・南無普賢菩薩」という文字、さらにその左右にも文字が書かれている〔与那国町史編纂委員会事務局 2010 pp.582・583〕。沖縄島読谷村では「南無阿弥陀仏」と書かれた白いチョーサジ（経手ぬぐい）を死者の顔にかぶせた〔読谷村史編集委員会 1995 p.246〕。
- ⁸ 氏によると、葬儀場のハンカチはペラペラなのでサラシを切って書くという。
- ⁹ カドの人は干支で選ぶ。「今日は何の人が亡くなっているからあんたが上等って行って、あんたやれと当てるわけさ、今年は寅年でしょ、その後ろ前さ」（黒島：神山善助氏）。竹富島では、ぬし（死者であろう）の月から数えて7カドが開ける人だという。1月卯、2月辰で、12月寅で数える。カドの人の選び方も島によって異なるようだ。
- ¹⁰ 同紙には、「話 - 念仏鐘の祟り」という見出しで次のような記事が掲載されている〔竹富町史編集委員会町史編集室 2001 p.102〕。

前に黒島で葬儀の際使用していた念仏鐘を伊古部落伊古氏宅に保管中の処、此の頃夜となく昼となく伊古氏宅に念仏鐘の音が聞え、「鼠もさはらぬのに毎日の如く鐘の音が聞えるのは念仏鐘のタタリに違いない」と恐れをなし、鐘の保管を部落に対して断ったことに端を発し、部落全住民は念仏鐘のタタリが現はれたと大騒動を演じているとか……。
- ¹¹ 勝連氏は「あの人（ユタ：筆者）は、エッエツとってお祈りしてよ、仏が自分にこう言えって行って」と語る。
- ¹² 1902（明治35）年には人頭税が廃止され、宮古・八重山でも徴兵検査が行われるようになった。

- ¹³ 八重山島庁から波照間村頭への通達を綴ったものである。
- ¹⁴ 銘刈真勢は波照間島の初の合格者であり、1904年勃発した日露戦争に出征し、同年7月満州で戦死した〔竹富町史編集委員会 2009 p.29〕。
- ¹⁵ 神行事のときに儀式を先導するシシバラ、神様の供え物作るポッサ（料理頭）などである。
- ¹⁶ そのため、日頃畳を十文字に敷くのは嫌われる。「畳は十文字にやることはできないですよ。畳なんか掃除するでしょ。十文字にやるのは大嫌いですよ」と勝連氏。
- ¹⁷ 「着物はみんな新しいものだよ。しかし、73に赤い着物を着けさせるさ。あれを着けさせていかせるのが礼儀上いいというのか、あれは沖縄あたりからどうかかわらんが、最近はあれに切り替えた」（勝連氏）というが、波照間の葬送習俗も常に沖縄島の影響を受けていることがわかる。
- ¹⁸ ガンダラゴウの入れ物は波照間中学校の隣の木立の中にあり、その門は棒を交差して縛ってあった。ガンダラゴウのそばに行くときは石3個を投げてから近づいた。ガンダラゴウに石をあてるわけではなく、その周辺に石をバンバンと投げた。悪者がうろうろしているかもしれないので追っ払うためだ。石を投げたあと、安心して紐を解いて中に入った（勝連氏）。
- ¹⁹ 勝連氏によると今でもタビの人が亡くなった場合は棧橋から自分の墓までお米を撒くという。
- ²⁰ 酒井によると、帰宅するものは家の後方の壁を棒で3回叩いて悪魔払いをしたあと家に入り、参加者は浜に出て潮水で身を清めた後、自宅の門口に火を焚き、この火をまたいでから家に入ったという〔酒井 1954 p.60〕。
- ²¹ 竹富島では乳呑児が死ぬときは悪霊がもらい乳に他の乳児の家に来るので、門口に木臼を外へ向けて倒しておき、その上へ杵を両方から立てかけた〔亀井 1990 p.385〕。
- ²² 黒島では、亡くなって3日目に願いをするのをミッカショーコーという。墓には行かない。「家の掃除さ、この家が汚れているでしょ。これをお祓いする意味だよ。三日でこっちのお祓い終わり。こっちの汚れとり、壁なんかみんな汚れているでしょ。これで終わりと願いだけやるわけさ」（神山善助氏）。このことから、三日目が単なる死の確認ではなく、死者を出した家の清めの意味があることがわかる。
- ²³ 崎山氏は2回この役をしたことがあるという。
- ²⁴ 仲本によると、この日墓地に持って行ったご馳走はすべてそこで食べなければならなかったという〔仲本 2004 p.55〕。また、仲本によるとミダチイまでは葬儀であるという〔仲本 2004 p.55〕。アウエハントによると墓を完全に閉じるのはミダチイのあとだという〔アウエハント 2004 p.325〕。
- ²⁵ 国頭地方では葬式のあった日から3日目に“魂別し（まぶいわかし）”という習慣があった。島袋源七によると、今帰仁村では葬式から3日後の晩には家族で集まり、主婦や家長、老婆が「極楽へ迷わずいかれよ」と祈願する。これで死霊と生霊との交わりを絶って別れをしたことになるという〔島袋 1927 pp.105・106〕。かつては亡くなってすぐ葬式が行われたことを考慮すると、この行事は死後3日後の行事と考えられる。

- ²⁶ 上瀬頭院主によると、竹富島では、ミーナンカ（21日）がタンシバイといって死者の魂を分ける日である。家主が麻糸4つに玉を結んだものを作り、一人一人に麻糸を配り、手に巻いて、「体はカラに、魂はここに」と魂の決別をする。香炉の前でお願いのお経をお坊さんが上げて、お別れをさせる。
- ²⁷ 加屋本によると、仏壇の間（二番座）に南枕にし、仰臥させた死人の両手を胸の上に組み合わせ、白布で顔を覆い、仏壇の前にイベ（白位牌）を置き香をたくが、この間、ニンブチャ（サイシ：筆者）によってニンブツが唱えられるという〔加屋本 1978 p.104〕。
- ²⁸ 葬式の日、若者たちが墓を掃除して墓の入り口を開くときも、サイシは唱えごとを述べた〔アウエハント 2994 p.324〕。
- ²⁹ アウエハントは出棺の移動（入棺後1番座に置かれた）によって時空の変換が既に行われたことになり、死者の新しい生活が始まることになるという〔アウエハント 2004 p.324〕。
- ³⁰ 葬送では、“たくさんのワルモノ”が死者にわるさをしようと待ち構えているだけでなく、死者もまた、生きている人に災いをもたらすと考えられていた。そのため魔除けの習俗が行われた。喜舎場によると、葬列では念仏者はダンチクの枝葉で龕を叩いたという。その理由は、これらの植物は臭気が強いため魔除けができると信じられていたからだという〔喜舎場 1977 p. 620〕。石垣では、行列を見にいく子供たちは必ず藁のサンを持って行って、龕を目がけて投げつけ、「ウフウフ」といって魔除けをし、道端の家は門口に竹竿や庭簾を横たえて魔除けをした〔宮城 1982 p.466〕。竹富島では道路に立っている人は魔除けの植物としてダンチクやミカンの枝をめいめいが持ち、柩が通る前にはこれらの枝で叩いて悪霊を払ったという〔上瀬頭 1976 p.131〕。このように、念仏者がダンチクの枝葉で龕を叩き、悪霊祓いをする行為は、以前は行列を見ていた人々が行ったのである。念仏者を受容した人々は、自分たちが行っていた魔除けの習俗を念仏者に託したことがわかる。
- ³¹ このような音による厄払いと浄化の習俗は沖縄一帯にあると考えられるが、筆者は実際に調査した八重山の事例のみを挙げた。
- ³² 上瀬頭院主によると、竹富島では“別れの水杯”というという。
- ³³ アウエハントも波照間の地の神の曖昧な性格について指摘している〔アウエハント 2004 p.318〕。